



インタビュー 児玉邦夫・幸子先生

1 + 1 + 1 = 20 ?

連弾といえば、児玉邦夫・幸子先生。とその名も高く、日本を代表する連弾奏者でいらっしゃる先生をお迎えしての第37回〈東音〉ピアノゼミナールに先立ち、お二人の出合いのこと、海外での御活躍のことなど、お話を伺ってまいりました。

郊外小金井市の一角。先生のお宅に現代のピアノと並んで、貴品高き女王さまのようなモーツァルト時代のピアノが、正座しております、しばしせちからいこの世を忘れる思いでした。

1 + 2 = 20とは、ピアノ1台・奏者2ということ、答は……。

そこにピアニストがおられる時、ふと頭に浮ぶことは、そのピアニストが育った土壌と申しましょうか、御家庭の状況は、いかがなものであったろうか、ということなのです。で、先主方の御両親様についても、お伺いしたいと思います。

児玉幸子 私のお父は、矢崎というのですが、父は矢崎虎雄という彫刻家です。一昨年でしたか、文部大臣賞をいただきまして、これからさらにがんばるんだと申しておりました。

母は、書道をやっておりましたが、結婚前は音楽の先生でした。姉妹は、2人だけです。

私が小学校低学年の頃、集団疎開があったのですが、その疎開先に、両親がオルガンを送って来てくれたのです。そこで、唱歌の伴奏など弾いておりました。

その内、戦災も激しくなって、父の実家の諏訪地方に一家で疎開することになりまして、私も両親の元に引き取られることになったのですが、私は、ワワワ泣いてしまいました。普通は、親元に行くといえば、よろこびますのに、その集団疎開でのオルガンのある生活が、とても楽しかったのです。

そして小学校4年でしたか、終戦を迎えまして、一年間位は、ピアノどころのさわぎじゃございませんでしたけれども、世の中が落ち着いて、ピアノを習いはじめたのです。

—— 初めての先生は？

幸子 正木先生という方で、昔のことですから、バイエルから習いました。

大学にはいるまで、ずっと諏訪におりましたので、高校にはいってから、現在、国立音大の教授をしておられる長峰和子先生に、みていただいておりました。

—— 幸子先生にはちょっとお休みいただいて、今度は、邦夫先生の御両親様は？

邦夫 私の父は児玉宗夫と申しまして、今の宮崎大、

当時の宮崎農高で、農業を教えておりました。

これ、現在の父ですよ。

（9月10日老人の日の宮崎新聞に、写真入りで紹介されているお父さまの記事を見せてくださった。今も毎日神社境内の清掃を欠かさず続けていらっしゃるという）兄弟は、5人です。私は下から2番目。

—— 先生がピアノを弾かれた動機は？

邦夫 それが大変面白いのですよ。父は、とてもくじ運が強い人で、勧業銀行か何かで、賞金があたって、それでオルガンを買ってくれたのです。

母が、女学校の頃、オルガンを弾いたことがあるとかで、私たち子供たちにオルガンの回りを歩かせながら、よく弾いてくれたものなんです。

それを聞いて、私は、耳からだけで、オルガンを弾いていたのです。これが鍵盤楽器との最初のふれ合いです。

それから、父が若い時、バイオリンを弾いたことがあるとか、天然の美だけ弾けるんだそうです。

—— 高校までずっと宮崎ですか。

邦夫 それが、また変わってましてね、中学校の時、配属将校と他愛もないことで、けんかしまして、こんな学校へいられるかっていうんで、予科練を受け最年少で合格して、中学校をやめてしまったのです。

予科練で、上海（シャンハイ）まで行って来ましたよ。そして終戦、予科練を止めて家に帰って来た時、16才位でしたか。そこで、宮崎農専に編入したのです。

この農専時代に、ピアノとの触れ合いが生れたのです。混声合唱団への勧誘があって、女の子と一緒に歌えるというので、入団してしまったのです。

ある時、男の友人が、合唱練習が終ってから、一人でピアノを弾き始めたのです。その友人にピアノの弾き方を教えてくれ、と頼んだことが、最初のピアノへの道なのです。

この時ピアノを弾いていたのが、後の民芸俳優富田浩太郎なのです。少年探偵団の明智小五郎なんか、やっていた人ですよ。

僕がピアノを叩いているのを見て、音楽の先生が教えてやろうといてくださり、バイエルという本を買ってきなさいということで、生れて始めて楽譜を買ったのが、5月11日、日までおぼえています。

僕がピアノを習い始めたのを見て、じゃあ僕もといっで、遅れること3ヶ月後にピアノを始めたのが、現在、ハチャトリアンについている作曲家の寺原伸夫なのです。

—— 同級生交談なんていう記事が、雑誌にありますね、それに登場できますね。

邦夫 それがもう一人いるのですよ。その時音楽と一緒に始めた友に、今、青山で音楽結婚式場の理事をしている小沢 泰なんです。

—— でピアノの先生は、ずっと同じですか。

邦夫 それがさっき申した音楽の先生なんです、ちょっとしか教わっていないのです。殆ど独学です。戦争中、満洲国歌を作曲した園山民平さんのお子さんと、ピアニストの園山謙二さんが、満洲から引揚げてこられて、よくピアノを弾いておられたのですが、それを塙によっかかりながら聞いたり、学校のおんぼろピアノを、その4人が、夜中じゅう交代に弾いていたのです。

ピアノの下に敷物を置いて、3人だけが寝られるようになっていましたから、1人は必ず練習していなければならなかったわけです。

そして昼間の授業は、毛布をしいてぐうぐう眠っていたり、まったくピアノのために学校へ通っていたようなものでした。

—— さて、それから順調に音楽学校へと進まれたわけですか。

邦夫 いえとんでもない。

私があまりピアノピアノというもので、家からは勘当されました。

祖父が、それじゃピアノを買ってやるから、やれる所迄やってみなさい。ということで、ピアノ1台持たされて、東京に嫁いでいた姉の家に厄介になることになったのです。

私があんまり朝から晩までピアノを弾いたために、近所のおばあさんが、ノイローゼになってしまったり、まったくいろいろなことがありまして、結局私自身が、病気がかかってしまったので、宮崎の家に帰ったのです。そうしたら、あんまりやせていたので、両親もかわいそうに思ったのでしょう、勘当を許されましてね、結局郷里で中学の教師を2年半もやることになったのです。

そこで英語かなんか教えていたのですから、まったく

冷汗もんですよ。

そしてその頃、東京に国立という音楽学校があるということを知って、また東京にでてきて国立音大の講習を受けたのです。そこで、右馬学長にほれこんで、手紙を出したのです。あなたの大学にはいりたいと障子紙に毛筆で書いて。

そして、国立音楽大学にはいったわけなのですが、中学校の教え子が、同じ時に同じ部屋に入学したのですよ。

—— 入学の費用は、どうされたのですか。

邦夫 一応勘当がとれていたのですが、父が出してはくれましたが、貧しかったですよ。夏の暑い時、レッスンをしていると、汗をかくものですから、先生が上着をぬぎなさいといてくださる。だけど、下に着ているワイシャツの背がぬけているもので、上着をぬげないんですよ。(大笑い) その時の先生は中村ハマ先生です。

お月謝もただでした。今でも感謝しています。

—— 最大の関心時は、邦夫・幸子の出会いですが、ちょっと立入って失礼ですが、お聞かせくださいませか。

幸子 邦夫が4年の時、私が1年だったわけですが、彼の教え子であり、私の同級生が、先生、先生と、とても彼のこと尊敬しちゃっているものですから、私もペコペコしていたのです。

そうしたら……。

邦夫 岡本敏明先生が、今度入学して来た子に、イイ子がいるよ、コンチェルトの伴奏をしてやれよ、とか、何とかおっしゃるものだから。

幸子 とても知的的にやってくるんですよ。どうしても一緒にならざるを得ないようなチャンスを作るんです。全員合唱の伴奏なんかすべて主人がやっていたのですが、主人が学校を卒えるとそれを私が引き受けたかっこうになってたんですね。

立場がよく似ていたということもあって……。

—— そして御婚約・御結婚?

幸子 私が専攻科を卒業した年の12月なんです。

邦夫 その年の夏、8月29日のこと、私交通事故にあってね、骨を五本も折ったんですよ。

12月の結婚式を延ばすようにと、親たちからはいわれる、そりゃ大変でした。学校(国立音大)は休職しているし。

幸子 結局、松葉杖について結婚式をあげたんですよ。

邦夫 仲人は岡本先生御夫妻でした。

—— ヨーロッパへ行っちゃったのはいつ頃いらっちゃったのですか。

幸子 ええ、主人の足がやっと治って、私費留学試験



に受かりまして、それからですから、1962年でしたかしら。

—— NHKの趣味の手帳で、邦夫先生のお話を聞いたのですが、それによりますと、始めから連弾の勉強のために留学されたのはなくて、1台のピアノで2人が練習をせねばならないことから、偶然のチャンスで、連弾の道にはいられたのだと伺いましたが。

邦夫 ええ、日本にはいる時も、たまには連弾をやっておりましたが、始めはソロの勉強に行ったつもりでした。

—— ウィーンで学ばれた先生は

幸子 ハンスグラーフという、ウィーンでは盛んに演奏活動をやっておられる方です。

邦夫、ディヒラー夫妻という世界で1・2位の連弾奏者の連弾演奏を聞いて、これをやるうということになったのです。

—— むこうでのデビューは？

幸子 プラームス・ホールです。1964年12月です。

邦夫 連弾リサイタルが非常に好評でしたもので、それから、ソロはしない連弾だけと定めたのです。そのリサイタルの後、ずい分お仕事をいたしました。そして1964年に一たん帰国いたしました。

児玉先生御夫妻の御活躍は、みなさんのよく知るところですが、1967年及び69年の再度のヨーロッパ演奏旅行。1967年11月の美智子妃殿下御成りのリサイタルや、毎年開催されている、日本でのリサイタルの数々。

11月16日のピアノゼミナールはその数多い演奏活動からくる、お話で大いに期待される所です。

今回、音楽之友社から、児玉先生選のすばらし連弾曲が出版されますが、その早からんことを希望するものです。すでに新興楽譜より「やさしいピアノ連弾集」がでています。またレコードは、キングより「エリゼーの為に」「春の歌」がでています。

今回ピアノゼミナールに使用される連弾曲は、児玉先生がお選びになったためずらしい楽譜で、リコピー実費でおゆずりしています。

誌上をお借りして、先生に謝意を表したいと思えます。

プログラム

第37回〈東音〉ピアノゼミナール

連弾のよろこび

講師 児玉邦夫

児玉幸子

日時 1970年11月16日(月) P.M. 6:30

場所 渋谷カワイサロン

四手のための練習曲No1	ベルティーニ作曲	佐藤英子(小5)	横山弥生(中1)
ロシア風のテーマによるフーガ	アレンスキー作曲	長谷川千恵子(小4)	田中広美(小6)
四手のための練習曲No21	ベルティーニ作曲		
靴やのポルカ	エルダ作曲	佐野芳子(小1)	佐々木ゆかり(小2)
シューバーペン地方の踊り	エルダ作曲		
バラライカ	ストラヴィンスキー作曲	池田みほ(6才)	柳沢敦子(6才)
レントラー	モーツァルト作曲		
葬送行進曲	ディヒャー作曲		
黒坊の踊り	グルリット作曲		